『鏡の国のアリス』「ジャバーウォッキー」中の造語 ‘*wabe*’ ‘*gyre*’ ‘*gimble*’ について

山内 暁彦

‘*Wabe*,’ ‘*Gyre*’ and ‘*Gimble*’ in ‘Jabberwocky’ in *Through the Looking-Glass*

YAMAUCHI Akihiko

言語文化研究　徳島大学総合科学部
ISSN 2433-345X
第 27 巻　別刷　2019 年 12 月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*
The Faculty of Integrated Arts and Sciences
Tokushima University
Volume XXVII, December 2019

『鏡の国のアリス』「ジャバーウォッキー」中の造語 ‘*wabe*’ ‘*gyre*’ ‘*gimble*’ について

山内 暁彦

‘*Wabe*,’ ‘*Gyre*’ and ‘*Gimble*’ in ‘Jabberwocky’ in *Through the Looking-Glass*

YAMAUCHI Akihiko

Abstract

This essay examines some unusual words in the poem ‘Jabberwocky’ in *Through the Looking-Glass* by Lewis Carroll. During her talk with Humpty Dumpty, Alice quickly guesses the complicated meaning of ‘*wabe*’ in ‘Jabberwocky.’ He acknowledges Alice’s guess and they continue the conversation. This reflects the actual situation of Carroll’s first story-telling on a boat in the famous ‘golden afternoon’ with the three Liddell girls. It is usually assumed that Carroll created the *Alice* stories by himself but those stories may have been inspired by his talk with the Liddell girls. Building on Alice’s role in composing the *Alice* books, Lewis Padgett’s short story “Mimsy were the Borogoves” makes Alice Liddell the real author of ‘Jabberwocky.’ In fact, the assumption that Carroll is the only creator of the *Alice* books might derive from films such as *Dreamchild* and from Carroll’s own words in such poems as ‘All in the golden afternoon’ and ‘A boat,

beneath a sunny sky.' Readers are likely to be influenced by the author's own words. For example, the pronunciations of '*gyre*' is not fixed because Carroll's direction to make the 'g' hard in '*gyre*' contradicts the soft sound of 'g' in 'gyroscope' mentioned by Humpty Dumpty. When based on the explanation by Humpty Dumpty, we should make the 'g' soft in '*gyre.*' However, '*gyre*' is pronounced as both [dʒaɪər] and [gaɪər] depending on reader preference. Japanese translations of 'Jabberwocky' also vary according to the translator's consciousness of the desirable pronunciation of '*gyre*' and '*gimble*,' i.e. [dʒaɪər] and [gɪmbl]. Japanese equivalents of '*gyre*' and '*gimble*' should be determined by paying attention to the words, 'gyroscope' and 'gimblet,' the origins of '*gyre*' and '*gimble*.'

序

本論では、ルイス・キャロル（Lewis Carroll, 1832-1898）の『鏡の国のアリス』*Through the Looking-Glass*（1871）の中の印象的な詩「ジャバーウォッキー」'Jabberwocky' の中の造語 '*wabe*'、'*gyre*'、'*gimble*' に着目し、『不思議の国のアリス』*Alice's Adventures in Wonderland*（1865）や、『鏡の国のアリス』の成立に関して、その真相がいかなるものであったかについて考える。すなわち、『不思議の国のアリス』や、その原型である『地下の国のアリス』*Alice's Adventures Under Ground*（1864）で語られる物語の原型が生まれたとされる、例の舟遊びの際にキャロルによって語られた「お話」が、実はその場に居合わせた少女たちとの対話を通じて成り立ったに違いないという想像の根拠の一つを、『鏡の国のアリス』の中の場面、具体的には、「ジャバーウォッキー」の中に散りばめられた難解な造語の中の一つである '*wabe*' の意味についての、アリス（Alice）とハンプティ・ダンプティ（Humpty Dumpty）とのやり取りの中に見出だそうとするものである。その際、ルイス・パジェット（Lewis Padgett）の短編「ボロゴーヴはミムジイ」"Mimsy were the Borogoves"（1943）の基本設定である、アリスこそがこの詩を生み出した人物である、という仮定を参照する。我々は、『アリス』作品がキャロルのみによって発想されたと思いなしがちだが、その理由の一つは、作者によって書かれた言葉が作品の受け取り方に大きな影響を与えてしまうということが挙げられる。その一例としては、「ジャバーウォッキー」中の '*gyre*' と '*gimble*' の英語での〈正しい発音〉が、現状の英語での発音を観察する限り、定まってい

ないという事象がある。我々読者がそれを判断する際、キャロル自身の「序文」の中の言葉によるべきか、それとも、作品中のハンプティ・ダンプティの説明によるべきかを、考察する。さらに、‘*gyre*’ と ‘*gimble*’ の〈正しい発音〉が、「ジャバーウォッキー」を日本語に翻訳する際に、どの程度再現できているかという問題を、各種の翻訳を検討しつつ考察する。

I

『鏡の国のアリス』の第６章で、アリスが「ジャバーウォッキー」の中の難解な語句の説明をハンプティ・ダンプティから聞かされる場面には、かなり不可解な点があることにはこれまであまり注意が払われていないようである。いろいろな語句の説明を聞く中で、アリスが本来は全く知らないはずの ‘*wabe*’ の語義をごく簡単に当ててしまうのである。それは以下の部分である。

> “And what’s to ‘*gyre*’ and to ‘*gimble*’?”
>
> “To ‘*gyre*’ is to go round and round like a gyroscope. To ‘*gimble*’ is to make holes like a gimblet.”
>
> “And ‘*the wabe*’ is the grass-plot round a sun-dial, I suppose?” said Alice, surprised at her own ingenuity.
>
> “Of course it is. It’s called ‘*wabe*,’ you know, because it goes a long way before it, and a long way behind it——”
>
> “And a long way beyond it on each side,” Alice added. [1]

> 「『ころかす』と『きりる』は？」
>
> 「『ころかす』ってのは、ジャイロスコープみたいにころころ転がるということ。『きりる』はねじ錐みたいに穴をあけるということだ」
>
> 「『にひろのち』というのは、日時計のまわりの草地のことじゃない？」アリスは言って、自分でも自分の頭のいいのにびっくりしました。
>
> 「その通り。その前にひろびろ続いておるし、その後にひろびろ続いているがゆえに、『にひろ』という名がついたのじゃ」
>
> 「横にひろびろもしてるのね」アリスがつけ加えました。[2]

---

[1] Lewis Carroll, *Alice’s Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass, and What Alice Found There* (London: Penguin Books, 1998) 187-88.

上記の引用箇所の中での ‘*gyre*’ や ‘*gimble*’ については、ハンプティ・ダンプティによる説明の中に見られるように、これらの語がそれぞれ ‘gyroscope’ や ‘gimblet’ に綴りや発音がかなりの程度照応しており、彼の語義の説明に読者はそれなりに納得させられるであろう。質問したアリスも、おそらくこの説明で納得したに違いない。ところが、‘*gyre*’ や ‘*gimble*’ に対して、‘*wabe*’ については問題がある。‘*wabe*’ が「日時計のまわりの草地」を指すということを、ハンプティ・ダンプティが述べるのではなく、アリスが先に推測しているのだ。「日時計」に関しては、直前に「とおぶ」が「日時計の下に巣をつくる」ことをアリスは聞き知っているので、これを思いついたとしても不自然ではないとしよう。問題は、日時計の「まわりの草地」という意味の方だ。これを言った人物が、ハンプティ・ダンプティではなく、アリスであったということ自体にかなりの無理があるのではないだろうか。上記の引用で明らかなように、このくだりの面白い点は ‘*wabe*’ というごく短い語が、‘way before’、‘way behind’、‘way beyond’ の３つ全てを含む概念であるということである。‘way’ の中の ‘wa’ と、‘before’、‘behind’、‘beyond’ の中の ‘be’ とが合体して、‘*wabe*’ という新しい語になっているという訳だ。しかしそれは、この一節の結論として明らかになるに過ぎない。ところが、アリスは初めから「まわりの草地」という語義に、いとも易々と思い至るのだ。さらに、それを受けて、ハンプティ・ダンプティが、 ‘before’、‘behind’ と、後付けするように詳しい語義を述べる。さらにそれに付け加える形でアリスは ‘beyond’ も、と述べているのである。本当にこんなことがあり得るだろうか。

‘*wabe*’ の発音の成り立ちについても多少の無理が生じている。‘*wabe*’ が ‘wa’ または ‘way’ と‘be’ とから成る語であるとして、‘wa’ と ‘way’ の発音は、これを便宜的にカナで表記すれば、ともに「ウェイ」で問題はないものの、‘be’ に関しては問題がある。‘*wabe*’ の中での ‘be’ は「ブ」であるのに対して、‘before’、‘behind’、‘beyond’ の中では、いずれも「ビ」に近い音であるはずだ。しかしながら、これを生かすように、‘*wabe*’ ないし ‘waybe’ の語尾を「ビ」として、これらの語を「ウェイビ」と読むのは、通常の英語の発音としては難しい。やはり普通に読めば「ウェイブ」が自然な読み方だ。また、‘*wabe*’ という語を見て真っ

---

[2] 作品からの引用は、この Penguin Classics 叢書の版により、本文中の括弧内に頁数を記す。ルイス・キャロル著、高山宏 訳、建石修志 絵『新訳 不思議の国のアリス 鏡の国のアリス』（青土社、2019 年）196 頁。『アリス』の両作品の翻訳は、原則としてこの版による。この著書を含め、縦書きのものは横書きに改めるが、その際、数字の種類や行の間隔などの改変を伴う場合がある。

先に思い出すのは、これと同じ４文字の単語であれば、例えば ‘wave’ や ‘babe’、あるいは ‘wake’ といったところであろう。[3] ところが、アリスはこのように４文字中の１字を変えるだけの単純な連想でなく、結果として ‘way before’、‘way behind’、‘way beyond’ の３つを含むことになる ‘round’ と言う語義を急に思いついたことになっている。本作には数多くの「カバン語」（portmanteau）が登場するが、通常のものならば、基本的には２つの意味が詰め込まれているに過ぎない。ところが、‘*wabe*’ の場合は、‘way’ に、‘before’、‘ behind’、‘beyond’ の３語が足され、都合４つの語が含まれることになる。

以上のようなことを考え合わせると、このくだりに関しては、筆者にはどうもあり得ない展開のように思えるということである。“[Alice was] surprised at her own ingenuity.”「（アリスは）自分でも自分の頭のいいのにびっくりしました。」と書かれているが、もし仮に、アリス自身が本当にこの語義を思いついたとしたら、彼女は驚いて当然であろう。しかしながら、ここで筆者が言いたいのは、アリスが ‘*wabe*’ という言葉の意味を自力で思いつくのは、やはり不可能に近いだろう、ということである。そして、このような不自然さが生じていることについては、これまで問題にされていない。例えば、キャロルの作品にあれほど詳細な注釈をつけたマーティン・ガードナー（Martin Gardner）も、この件については取り立てて何か指摘している訳ではないのである。[4] 取り立てて議論がなされていない理由の一つは、恐らく、大抵の読者がこのくだりはさっと読み飛ばしてしまうからであろうが、少しよく考えれば不自然な感じが残るのは否めない。

ここで、アリスとハンプティ・ダンプティのやり取りが描かれた部分の展開を注視してみよう。すると、この展開は、年長の男性とまだ幼い少女との間の会話でしばしば見られるような現象であることに気がつく。これはむしろハンプテ

---

[3] “Merriam-Webster” のオンライン辞書には ‘wabe’ という語の項目はなく、検索語として ‘wabe’ を入力すると、代わりに ‘fabe’ や ‘gabe’ などが提案される。<https://www.merriam-webster.com/ dictionary/wabe>（2019 年 11 月 22 日閲覧）

[4] マーティン・ガードナーが詳細な注をつけた、*The Annotated Alice: Alice’s Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass by Lewis Carroll* (Harmondsworth: Penguin Books, 1970) の 191 頁以降には、元の ‘Jabberwocky’ 詩の本文に 12 番から 35 番まで計 24 件もの注が付けられているが、‘*wabe*’ には何も注が付けられていない。第 6 章のハンプティ・ダンプティによる説明の部分も同様である。Penguin Classics 叢書中の *Alice’s Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass* においても、巻末にまとめられた詩の注は ‘*gyre and gimble*’ の次が ‘*mimsy*’ になってしまっていて、両者の中間にある ‘*wabe*’ には注が付けられていない。

ィ・ダンプティが、アリスに単に調子を合わせているだけなのではないか。先に、アリスが語義を思いつくのは不可能に近いと述べたが、百歩譲ってアリスが本当に、‘*wabe*’の持つ「まわりの草地」という語義に思い至ったのかも知れない。ただしその場合も、アリスにはおそらく何の確信もなく、全く当てずっぽうで言ったに過ぎないということもあり得よう。いずれにせよ、アリスの言葉を聞いていたハンプティ・ダンプティの方が、上手くアリスに調子を合わせて、彼女の勝手な解釈を自分の説明の中に取り入れ、‘*wabe*’という言葉の解釈を、その後も平然と述べ続けることを選んだのではないか、ということである。それは、意識的にであったか、あるいは無意識的にであったか、いずれとも判然とはしないとしても。

こうした物語の中のハンプティ・ダンプティとアリス関係性は、ちょうど、1862年７月４日の舟遊びの時に、キャロルことドジソンが語る不思議の国の物語に、横合いからアリス・リデルをはじめとする遠足の一行が、話の合間あい間に、キャロルに対して話の筋やディティールを口々に提案したりしながら、キャロルとともに冒険のお話を徐々に形作っていったに違いないと想定することと相似である。[5] キャロルが、終始、一方的に、ボートの上の聞き手を楽しませる話をしたと考えるより、同行の皆と物語の細部についてや、物語の展開について、様々なやり取りをしながら舟遊びを楽しんだと考える方が自然ではないだろうか。常識的にはキャロルことドジソンだけが一方的な話し手だったとは考えにくい。むしろ、その場の面々と双方向的なやり取りを積み重ねることによってこそ、『不思議の国のアリス』のような多彩で多義的な作品が生まれたと考えるべきであろう。そして、後年『鏡の国のアリス』をキャロルことドジソンが書く際に、その時の記憶が彷彿とした結果として、アリスとハンプティ・ダンプティとの協力的な対話の中での‘*wabe*’の語義の提示の場面ができ上がったのではないか、ということである。[6]

もちろんこれは筆者の推測に過ぎないものではある。キャロルことドジソンが、もっぱら自分の「お話」を一人でし続けたのではないという証拠もない。だが、筆者と同じような推測をさらに推し進めて、奇妙であるが感動的な SF 作品を書いた人物がいる。次節ではその人物、ルイス・パジェット（Lewis Padgett）とそ

---

[5] 近年、‘Dodgson’と‘Liddell’の発音について「ドッドスン」や「リドゥル」などと記す場合があるが、本論では従来通り「ドジソン」「リデル」と記す。

[6] アリスに先述のような発言をさせた背景には、作者キャロルには、アリスの賢さを強調して見せたいという願望があって、幼いアリスに少し背伸びをさせている、ということもあり得る。

の作品を扱いたい。

Ⅱ

ルイス・パジェットは、ヘンリー・カットナー（Henry Kuttner, 1915-1958）と C. L. ムーア（Catherine Lucille Moore, 1911-1987）の夫婦合同のペンネームである。パジェット、カットナー、ムーア、いずれも大変な多作であり、玉石混交、様々な作品が知られており、かなりの数が邦訳もされているが、本論で取り上げる作品は、20 世紀 SF の傑作「ボロゴーヴはミムジイ」“Mimsy Were the Borogoves” である。2007 年には、この短編を原案とする映画も制作されている。そのタイトルは *The Last Mimzy*、邦題は『ミムジー：未来からのメッセージ』である。[7] 『鏡の国のアリス』～ 短編「ボロゴーヴはミムジイ」～ 映画『ミムジー：未来からのメッセージ』という系譜になっている訳であるが、映画の考察は別の機会に譲り、本論では原作の短編小説を主に扱う。

先に、キャロルの創作に際して周囲の親しい友達とのやりとりが大きな役割を果たしたに違いないという趣旨のことを述べたが、我々はどうしても『地下の国のアリス』から、『不思議の国のアリス』や『鏡の国のアリス』に至るまでの『アリス』作品が、専らキャロル一人の創作によって出来上がったものであるという通念にとらわれているだろう。その理由はいくつか考えられるが、その最たるものは、キャロル自身が作品中の前後に添えたいくつかの印象深い詩の内容から我々読者が受けてきた影響が大きい。さらには、作品に基づいて様々に制作されて来た多くの映像作品から我々が受け続けて来た印象も同様に大きい要因であるだろう。キャロルの原作、映画、演劇、その他の様々な言説からの影響が長年にわたって積み重なった結果、「お話をするキャロルことドジソンと、彼の「お話」を黙って聞いているだけの子供達」という関係性の中から『アリス』作品が紡ぎ出されたのだというイメージが醸成されてきたものだろう。ただし、よく考えてみれば、そうした一方通行的な状況は、先にも述べたように、いかにも不自然なものであるのも事実である。ちょうどアリスとハンプティ・ダンプティとの ‘*wabe*’ の語義にまつわるやり取りで見られたのと同様の状況が、キャロルことドジソンと、その周りの人々との間にもあったに違いないのだ。パジェットはこの

---

[7] 映画では、原題、邦題ともに、固有名詞の文字が元の短編とは微妙に異なっている。‘Mimsy’ は ‘Mimzy’ に、「ミムジイ」は「ミムジー」に、それぞれ変えられている。これらの変更は意図的なものであると思しい。

ような観点を大胆に自作に取り入れているのである。すなわち、彼らは、キャロルことドジソンだけに作品の成立の際の責任を帰すのではなく、彼と少女たちとの互いのやり取りの中で作品が成立した、との考えに立っているのだ。そして、これをさらに敷衍して、アリス自身を『アリス』物語の淵源とするという考えにパジェットはたどり着いた。そして彼は、この仮説に基づいて、味わい深い物語を紡ぎ出したのである。

ここからはルイス・パジェットの短編「ボロゴーヴはミムジイ」の詳しい分析に入ることとする。この小説の主人公である幼い兄妹、スコット（Scotty）とエマ（Emma）は、未来の異世界でのタイムマシンの実験の際の些細な事故が原因で、現代の地球上にもたらされた、様々なガジェットを偶然手にする。その後、様々な機材で遊ぶうちに、大人であれば失ってしまったであろう精神的な柔軟性を幼い子供なりに十全に生かすことによって、最終的には、この世＝地球＝現世を後にして、どこか遠くの未知の世界へ去って行く。このように、本作は、驚異の感覚に満ちた素晴らしい作品である。３次元と４次元にまたがっている非ユークリッド的な立体パズル（作中では ‘abacus’ だが、平面的な「そろばん」ではないようである。）や、人間に似てはいるが臓器などがかなり異なっている未知の生命体の生々しい生体模型、見る者が中の出来事を意のままに操作できるクリスタルガラス内の小世界など、映像化が不可能と思えるようなガジェット類が作中では描かれる。[8] 更には、この結末近くで『鏡の国のアリス』が重要な役割を持っていることが判明するところにも感銘させられる。幼い兄妹が所持していた『鏡の国のアリス』の刊本の破り取られたページは、大人にはただの落書きとしか見えない描画で埋め尽くされてしまっている。その紙切れを、父親であるパラダイン氏（Paradine）が見出すのであるが、かろうじて彼が判読し得たのは、まさしく「ジャバーウォッキー」の詩が印刷された箇所であった。彼が『鏡の国のアリス』や「ジャバーウォッキー」をよく覚えていた点にも驚ろかされるが、それより遥かに読者の心を打つのは、「ジャバーウォッキー」を創作したのは、実はキャロルことドジソンでなく、アリス・リデル本人だった、ということが、本作「ボロゴーヴはミムジイ」の物語の前提になっているという点だ。未知の世界からもたらされたガジェットに触発されて「ボロゴーヴはミムジイ」のスコットとエマは現世から去ってゆくが、アリス・リデルがそうならなかったのは、たま

[8] 映画『ミムジー』では、これらのガジェットは、全く別の物体に置き換えられている。その中で最重要なのは、「ミムジー」という名のウサギのぬいぐるみであり、アリス・リデルがそれを手に持っている写真が紹介される。原作に描かれた物のうちでは、生体模型らしいものが一瞬映るに過ぎない。

たまアリスがスコットやエマより年長であったということだけが、その理由である。謎めいた数々のガジェットに接したことで、アリス自身もスコットやエマと同じような経験をしたはずである。つまり、「ジャバーウォッキー」の詩の文言の一つ一つが未知の世界へと至るためのヒントをアリスにも提供していたはずなのである。こういう訳で、先ほどの「創作した」という表現は正確ではないことになる。むしろそれは未知の世界からの一種の啓示によって生み出されたのものであった、と言うべきだろう。結局のところ、「ボロゴーヴはミムジイ」で最も感銘を受けるのは、アリス・リデルが異世界からの謎に満ちた例のガジェット類を既に受け取っていて、謎の解明と異世界への旅立ちまであと一歩だったということと、その過程で謎に満ちた「ジャバーウォッキー」の詩が生まれてきたという点である。

「ボロゴーヴはミムジイ」の物語の現在時点は現代のアメリカであるが、作品の終わり近くで、物語は突如 19 世紀の後半の英国へと移る。テムズの川べりでアリスが「チャールズおじさん」（Uncle Charles）こと、チャールズ・ドジソンと、次のような会話をする場面が挿入される。彼は、アリスが歌を歌うのを聞いている。その場に他の人物は誰もいないようである。

> “What was that, my dear?” he asked at last.
> “Just something I made up, Uncle Charles.”
> “Sing it again.” He pulled out a notebook.
> The girl obeyed. [9]

> 「それはなんだい？」やがて、彼は聞いた。
> 「あたしが作った歌よ、チャールズおじさん」
> 「もう一度、歌ってごらん」彼はノートをとりだした。
> 少女は言う通りにした。[10]

ここで分かるのは、ある時アリスが何気なく歌った歌の文句を、キャロルことド

---

[9] Lewis Padgett, “Mimsy Were the Borogoves,” in Robert Silverberg, ed., *The Science Fiction: Hall of Fame, Vol. 1, 1929-1964* (New York: Tom Doherty Associates, 1970) 207.

[10] 拙訳は、ルイス・パジェット著、伊藤典夫 訳「ボロゴーヴはミムジイ」（高橋良平 編『伊藤典夫訳 SF 傑作選：ボロゴーヴはミムジイ』（早川書房、2016 年）所収）を参考にし、原文に合わせて一部の文言を修正したものである。

ジソンがノートに書き留めていたということである。さらに２人の会話は続く。

> “Does it mean anything?”
> She nodded. “Oh, yes. Like the stories I tell you, you know.”
> “They’re wonderful stories, dear.”
> “And you’ll put them in a book someday?”
> “Yes, but I must change them quite a lot or no one would understand. But I don’t think I’ll change your little song.”
> “You mustn’t. If you did, it wouldn’t mean anything.”

> 「意味はあるんだね？」
> 彼女はうなずいた。「ええ、そうよ。私がしてあげてるお話みたいにね」
> 「あれは面白いお話だよね」
> 「いつか、ご本にするんでしょう？」
> 「うん。でも、いろんなところを変えなくちゃ。でないと誰にも分からないよ。でも、今のお歌は変えなくても良さそうだ」
> 「変えちゃいけないわ。変えたら分からなくなっちゃうもの」

詩の文言は変えてはならない、とアリスが言っていることから、個々の言葉の真の意味をアリスが説明することはないながらも、その詩の中の様々な言葉が持つ重要性は、彼女には認識することが十分できている、ということのようである。さらに驚くべきことは、アリスに由来するのは「ジャバーウォッキー」の詩だけではないということだ。『不思議の国のアリス』や『鏡の国のアリス』という物語自体さえも、元々はキャロルことドジソンでなく、アリス自身が物語ったものであったということが、「ボロゴーヴはミムジイ」という作品の世界では暗示されているという点である。流石にここまで事実とかけ離れてしまうと、この作品が虚構の SF であるとはいえ、かなり無理がある設定であるように多くの読者には感じられるだろう。だが、パジェットの発想は、中途半端な形で終わっていないという点は特筆に値する。この作品の設定では、最終的に出来上がった『不思議の国のアリス』や『鏡の国のアリス』という作品は、アリスの語った「お話」に、キャロルが後にかなり手を加えた結果出来上がったものである、ということになっている。そして、その中の「ジャバーウォッキー」の詩だけは、アリスが歌った元のオリジナルの形が保たれていて、それが『鏡の国のアリス』にそのまま含まれる形で、我々の目の前に存在している、ということなのである。非常に

興味深い設定ではないだろうか。

実際の『不思議の国のアリス』や『鏡の国のアリス』がこうした経緯でできたということではもちろんない。あくまでもキャロルことドジソンの作品であることに変わりはない。特に「ジャバーウォッキー」の詩は、キャロルがまだ若い頃に自分の家族を楽しませるために書いたものであることがよく知られている。彼が執筆し、挿絵をあしらい、弟妹たちに回覧して皆で楽しんだ家庭誌『ごったまぜ』*Mischmasch* の 1855 年の号に、この詩の本体とそれに添えられた語釈とが見られるのだ。[11] 当時キャロルは 23 歳であったが、それから年月を経て、長く温めてきたものを、多少の改変はあるものの、ほとんどそのままの形で世に出したのが『鏡の国のアリス』の中の「ジャバーウォッキー」の詩と、ハンプティダンプティの説明であるということであり、現実にはキャロルの作者としての地位は揺るぎない。ただし、パジェットの「ボロゴーヴはミムジイ」における設定は、アリス・リデルやその他の人々の関与が、いずれの『アリス』作品の成立に際してもかなりの程度あったはずだと推測したり、文学作品の成立に限らず、現実の様々な事象について〈事の真相〉がどうだったかについて思いを馳せたりする場合に、我々が想像を膨らますヒントになり得るものとして捉えることは可能であろう。

Ⅲ

『不思議の国のアリス』の成立の最初の段階から、次作の『鏡の国のアリス』の出版に至るまで、我々はキャロルことドジソンが専一にそれらの作品の責任を負っていると感じているだろう。ある意味、それが作者であるということであろう。しかし、作品というものは、実際はもっと多方面からの影響を受けながら生まれるものであろう。キャロルだけが作者ではないのだ。例えば、例の舟遊びの場面にしても同様である。我々は、キャロルことドジソンが一方的な語り手であ

---

[11] *Mischmasch* の 1855 年の号の「アングロサクソンの古歌」“Stanza of Anglo-Saxon Poetry” での言葉の意味は、ハンプティ・ダンプティの説明と多少異なっている。特に、‘*gyre*’ については下記のように大きく異なっていて「犬のように引っ掻く」となっている。一方の ‘*gimble*’ についてはあまり変化がない。

GYRE, verb (derived from GYAOUR or GIAOUR, ‘a dog’). ‘To scratch like a dog.’

GYMBLE (whence GIMBLET). ‘To screw out holes in anything.’

Martin Gardner, ed., *The Annotated Alice*, 191 参照。翻訳は、マーチン・ガードナー注、高山宏 訳『鏡の国のアリス』（東京図書、1980 年）28-29 頁。

り、他の面々が一方的な聞き手であっただろうと何となく感じているとすれば、こうしたイメージが出来上がった由来ないし背景をここで考えてみるのも意義のあることだ。何故我々は、このようなある種の思い込みをしているのだろうか、ということである。その最大の要因は、無論キャロルの本そのものの中にあるだろう。『不思議の国のアリス』の冒頭の詩「すべて金色の午後」‘All in the golden afternoon’のことである。本件に関連する詩行のみを抽出して記せば以下のようになる。

All in the golden afternoon
. . . . . .
To beg a tale of breath too weak
　To stir the tiniest feather!
. . . . . .
And faintly strove that weary one
　To put the subject by,
. . . . . .
“The rest next time—” “It is next time!”
. . . . . .
Thus grew the tale of Wonderland:
　Thus slowly, one by one,
Its quaint events were hammered out
　And now the tale is done,

すべて金色の午後
・・・・・・・・・・・・・
軽い羽さえ吹き飛ばせぬ
　力ない息にお話ねだるとは！
・・・・・・・・・・・・・
語り手疲れて、力なく
　お話おあずけと言いだすのは
「また今度」—「いまがその今度」
・・・・・・・・・・・・・
かくて「不思議の国」の話は成れり、
　かくもゆっくりじゅんぐりに。

へんな筋立てもひねりだしつ
　かくてしまいまで物語かたり、[12]

結局のところ、この詩を通読した結果として残る印象は、リデル家の３人の子供達、アリス、ロリーナ（Lorina）、イディス（Edith）に、せがみにせがまれて、キャロルことドジソンが「お話」を続けた結果、疲れ果てながらも、やっとのことで、物語を語り終えられたのだった、というものである。物語を語っていたのはキャロル一人であったという印象が残る。もちろん３番目のお嬢さん（Tercia）ことイディスがしばしば話の腰を折るようであるのだが、物語の内容に影響を与えこそすれ、あくまでも物語の語り手はキャロルであることに変わりはない。また、その場に居合わせたはずのダックワース（Duckworth）は、詩の中では無視されていて、その場に居なかったことにされてしまっている。

『鏡の国のアリス』巻末の 21 行からなる「跋詩」も同様の効果を持つ。その冒頭の６行は以下のようである。

A boat, beneath a sunny sky
Lingering onward dreamily
In an evening of July—

Children three that nestle near,
Eager eye and willing ear,
Pleased a simple tale to hear— (241)

くれやらぬ　七月の宵
はれわたる　空をあおいで
ゆらゆらと　船はたゆたう

三人の　小さき娘
お話に　耳をそばだて
キラキラと　目をかがやかす [13]

---

[12] 高山宏 訳、佐々木マキ 絵『不思議の国のアリス』（亜紀書房、2015 年）巻頭。
[13] 脇明子 訳『鏡の国のアリス』（岩波少年文庫、2000 年）265 頁。

耳をそばだてる３人の娘と「お話」を語るドジソンという構図が、ここにも繰り返されていて、「お話」の作者をキャロル 1 人に限定してしまうような我々の印象をますます強める結果になる。

さらには『アリス』の映像化作品から培われてきたイメージも、かなりの程度、このような印象の要因になっていることも疑いない。特に、1985 年制作のイギリス映画『ドリームチャイルド』 *Dreamchild* で描き出された舟遊びの場面は印象に残るものだ。[14] この映画では、晩年のアリス・ハーグリーヴズ夫人（Mrs Alice Hargreaves）が、キャロル生誕 100 周年の記念にアメリカはニューヨークに招かれるのを現在時点とし、彼女の回想シーンの中で、キャロルことドジソンと交流した、英国での少女時代の様子が何回となく描かれるだけでなく、イメージ映像的に『不思議の国のアリス』の中の主要なキャラクター達が実体化して登場し、少女時代のアリスや、老年のアリスと言葉を交わすという、非常に凝った作りになっている。これはまさに玄人向けの、キャロリアンのための映画であるが、ハーグリーヴズ夫人を演じたコーラル・ブラウン（Coral Browne）の気品と貫禄のある演技、少女時代のアリスを演じたアメリア・シャンクリー（Amelia Shankley）の可憐な容姿と物怖じしない態度、さらに老若２人のアリスのギャップが相まって、数々の『アリス』映画の歴史に残る作品になっている。特に、イアン・ホルム（Ian Holm）演じるドジソンとアリスとの心の触れ合いと微妙なすれ違いが描かれたいくつかのシーンは見事と言って良い。その中で、例の舟遊びの様子も再現されている。ゆったりと流れる川面に浮かぶボートの上で「お話」をするドジソンと、彼の話に聞き入る一行。史実と異なるのはリデル夫人がそこに居ることであるが、これは大きな問題には見えない。むしろ、少女達、とりわけアリスとドジソンの中をそれとなく監視するかのようなこの時の夫人の態度が、別の場面でドジソンからの手紙を破り捨て火にくべる場面へとつながる演出上の効果が意図されたものだろう。という訳で、こうした印象的な映像化作品であれば、川遊びの場面が我々の目に焼きついていても驚くには当たらない。ただし、こうした印象的な映像作品が作られた要因も、キャロルの書いた詩にあるとすれば、我々の持つイメージの淵源はやはりキャロル自身の書いたものにあると言うべきである。

---

[14] *Dreamchild* <https://www.youtube.com/watch?v=wwnoJ-WSEEY>（2019 年 11 月 28 日閲覧）

Ⅳ

作品の成立にまつわる事情に対する我々の受け取り方は、様々な要因から影響を受けるものである。特に、作者自身が自己の作品について何らかのコメントを述べると、一般の読者はその一言一句から大きな影響を受けることになる。ある意味、これは当然のことではあるが、それをどの程度真剣に受け取るべきかは、また別の問題であろう。場合によっては、作者の言を過度に信用し過ぎないことも必要ではないだろうか。ここで考えてみたいのが、「ジャバーウォッキー」の中の ‘*gyre*’ や ‘*gimble*’ の発音である。以下においては、これらの語、とりわけ ‘*gyre*’ という語について作者の言葉が大きな影響を及ぼしたかについて見ていく。まず最初に、改めて詩の冒頭４行を挙げる。

“’Twas brillig, and the slithy toves
Did gyre and gimble in the wabe:
All mimsy were the borogoves,
And the mome raths outgrabe” (187)

ゆうまだきにぞ　ぬらぬらとおぶ
　にひろのちにや　ころかしきりる
うたてこばれたるぼろごおぶ
　えかりたるらあすぞひせぶる [15]

「ジャバーウォッキー」の中の難解な語句についてのハンプティ・ダンプティによる説明では、‘*gyre*’ や ‘*gimble*’ に関しては、それぞれ ‘gyroscope’（ジャイロスコープ）と ‘gimblet’（ギムレット）が言及されていることで、これらの造語が持つ意味と同時に、それぞれの言葉の発音もまた示されている。便宜上カナで表記すれば、それらが「ジャイア」と「ギンブル」であるのは、この時点で明らかなはずである。

“And what’s to ‘*gyre*’ and to ‘*gimble*’?”
“To ‘*gyre*’ is to go round and round like a gyroscope. To ‘*gimble*’ is to make holes like a gimblet.” (116)

---

[15] 高山宏 訳『新訳 不思議の国のアリス 鏡の国のアリス』131 頁。２行目の「にひろのちにや」の後に１字分のスペースを補っておく。

「『ころかす』と『きりる』は？」
「『ころかす』ってのは、ジャイロスコープみたいにころころ転がるということ。『きりる』はねじ錐みたいに穴をあけるということだ」[16]

そうであるにも関わらず、「1896 年のクリスマス」という日付を持つ、「序文：『鏡の国』61,000 部台に向けて」‘Preface to the Sixty-first Thousand Edition of *Through the Looking-Glass*’ でキャロルが以下のように述べていることが、これらの語の発音に関わってかなりのインパクトを持つことになったに違いない。キャロルの記述を我々は金科玉条のように思ってしまい、「ガイア」と「ギンブル」でなければならない、と考えてしまっているのである。ここで改めてキャロルの「序文」を見てみよう。

> The new words, in the poem “Jabberwocky”, have given rise to some differences of opinion as to their pronunciation: so it may be well to give instructions on *that* point also. Pronounce “slithy” as if it were the two words “sly, the”: make the ‘g’ *hard* in “gyre” and “gimble”: and pronounce “rath” to rhyme with “bath.” [17]

> 「ジャバーウォッキー」の中の新しい語句の発音について色々な意見の相違がでて参りました。従いまして、その点についても指示をしておくのが宜しかろうと存じます。“slithy” は、あたかも “sly, the” と２語であるかのように、“gyre” と “gimble” の ‘g’ は硬い音で、“rath” は、“bath” と韻を踏むように、それぞれ発音なさって下さい。[18]

このように非常に明快に発音の指示がなされているので、読者がこれを絶対的に感じてもやむを得ない部分もある。英語の ‘g’ の発音は一義的に定まらないのであるが、これは英語という言語の特性の一つである。‘*gyre*’ は、硬く「ガイア」なのか、柔らかく「ジャイア」なのか？ また、‘*gimble*’ は、硬く「ギンブル」なのか、柔らかく「ジンブル」なのか？ 母語話者でもこれらの語の〈正しい発音〉がどういうものなのかを把握するのに苦労したということが分かって大変興味

---

[16] 高山宏 訳『新訳 不思議の国のアリス 鏡の国のアリス』196 頁。
[17] Lewis Carroll, *Alice’s Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass, and What Alice Found There* (Penguin Books) 357.
[18] 拙訳では説明の都合により一部英語の原綴りを保持しておく。

深い。そうした多くの読者の悩みを作者自らが解決してくれたということ自体が有り難いことだったのである。その結果、柔らかい「ジャイア」と硬い「ギンブル」の発音ではなく、共に硬い「ガイア」と「ギンブル」の発音が流布したと考えられるのである。しかしながらそれは間違いではないのか、やはり「ジャイア」と「ギンブル」が正しいのではないか、というのが筆者の考えである。

V

以下においては「ジャバーウォッキー」中の ‘*gyre*’ や ‘*gimble*’ の発音について、英語の音声面からも詳しく見ていこう。筆者の考えでは「ジャイア」と「ギンブル」が〈正しい発音〉なのであるが、実際はどういうことになっているだろうか。

昨今はネット上に沢山の朗読があるので、その中から一つ挙げれば、“Through the Looking-Glass (Full Audiobook)” という表題が付けられたものは、『鏡の国のアリス』を３時間余りにわたって朗読するものだが、その中の「ジャバーウォッキー」の詩の中の箇所も、ハンプティ・ダンプティの説明の箇所も、ともに正しく「ジャイア」と「ギンブル」で発音している。[19] また、テリー・ギリアム（Terry Gilliam）の 1977 年の映画『ジャバーウォッキー』*Jabberwocky* の冒頭、詩の初めの４行が朗読される箇所では、‘*gyre*’ と ‘*gimble*’ は正しく「ジャイア」と「ギンブル」で発音されている。[20] ところが、かつて北星堂書店から出ていた大学用の英語テキストの『鏡の国のアリス』にはカセットテープが付属していたが、その音声を改めて聞いてみると、詩の朗読の箇所でも、ハンプティ・ダンプティの説明の箇所でも、いずれも「ガイア」と「ギンブル」で発音がされている。[21] オックスフォード出版局から出ている Oxford Bookworm シリーズの『鏡の国のアリス』の再話には「ジャバーウォッキー」の始めの４行だけが引用されているが、この版に付けられた CD の音声でこの箇所の朗読を聴くと、やはり「ガイア」と「ギンブル」で発音している。[22] このダイジェスト版は総語数１万語、レベル３

---

[19] “Through the Looking-Glass (Full Audiobook)” <https://www.youtube.com/watch?v= hRLLrlOpx9c> （2019 年 11 月 22 日閲覧）

[20] *Jabberwocky* <https://www.youtube.com/watch?v=mKDxK7nNE0A>（2019 年 11 月 22 日閲覧）

[21] 松島正一 編注『鏡の国のアリス』（北星堂書店、1984 年）付属カセットテープ

[22] Lewis Carroll/retold by Jennifer Bassett/with original illustrations by John Tenniel,

の、どちらかといえば初級者向けのものであるから致し方ないことであるが、「ジャバーウォッキー」の詩は冒頭の４行だけが採られているのみならず、ハンプティ・ダンプティが登場する場面では、語義の解説の部分が完全に削除されてしまっている。「ジャイロスコープ」の「ジャ」の音を受けて‘*gyre*’の発音がどう処理されるかは興味があるが、本に書かれていない以上、その音声も存在しない。

‘*gyre*’と‘*gimble*’を「ガイア」と「ギンブル」のように発音しているものの例として、ネット上に活躍の場を広げているエルータン（Erutan）という女性歌手の「ジャバーウォッキー」という曲もある。[23] この曲は原作と同一の歌詞を持っている。エルータンは、ケルト風の美しい曲調と透明感のある歌声が魅力的であり、この曲も一聴に値するのであるが、残念ながら「ガイア」と「ギンブル」である。

2010 年の映画『アリス・イン・ワンダーランド』*Alice in Wonderland* でも、ジョニー・デップ（Johnny Depp）が演じる帽子屋ことマッドハッター（Mad Hatter）が、原作とは少し文言を異にするものだが、「ジャバーウォッキー」の詩を口ずさむ場面がある。彼の発音は‘r’の音をことさらに響かせる独特のものだが、‘*gyre*’と‘*gimble*’は、「ガイア」と「ギンブル」に聞こえる。以上の例を見た限りでは、ハンプティ・ダンプティによる語義の説明を欠いた、詩の朗読や曲の歌唱の際は、「ガイア」と「ギンブル」の発音の方が「ジャイア」と「ギンブル」よりも一般的になってしまっている感がある。

さらに映像作品について述べれば、1985 年のテレビ映画『不思議の国のアリス』*Alice in Wonderland* には、手にした本に印刷された詩をアリスが読み上げるシーンがある。ナタリー・グレゴリー（Natalie Gregory）の演じるアリスのここでの発音でも、‘*gyre*’と‘*gimble*’を「ガイア」と「ギンブル」と言っているように聞こえる。彼女が詩を読み上げた直後、怪物ジャバーウォッキーが家の中に突如出現し、この映画自体がいわゆる「Ｂ級」な状態に格下げされてしまうのはかなり残念な点だ。この怪物は再三登場し、その度にアリスや他の登場人物が悲鳴を上げて逃げ惑う演出には疑問が残る。主役をはじめとする役者たちのアメリカ英語の発音も、個人的には多少聞き苦しく感じる。[24]

Through the Looking-Glass [audio CD pack] (Oxford Bookworms Library: Classics: Stage 3), (Oxford: Oxford UP, 2008)

[23] Erutan, ‘Jabberwocky’ <https://music.amazon.co.jp/albums/B07CG57DP3?tab=CATALOG&ref=dm_wcp_albm_link_bh>（2019 年 11 月 22 日閲覧）

[24] *Alice in Wonderland* <https://www.youtube.co./watch?v=g7dxhbHAGRE>（2019 年 11 月 28 日閲覧）

ケイト・ベッキンセール（Kate Beckinsale）主演のテレビ映画『アナザーワールド～鏡の国のアリス』*Alice Through the Looking-Glass* では、数度にわたって ‘*gyre*’ や ‘*gimble*’ の発音を聞くことができる。彼女の発音はイギリス英語であり心地よく響く。映画の冒頭で彼女が本を１冊手にとって「ジャバーウォッキー」の始めの部分を音読する場面にしても、映画の半ばでハンプティ・ダンプティが、男の子とジャバーウォッキーの対決の場面に被せるようにして、詩の全体を暗唱する場面にしても、ともに「ガイア」と「ギンブル」の発音で通している。

ただし、ハンプティ・ダンプティによる語義の説明の部分になると、多少事情が異なっている。ケイト＝アリスの発する “What’s the ‘*gyre*’ and ‘*gimble*’?” 「‘*gyre*’ と ‘*gimble*’ は、何？」という質問に対して、ハンプティ・ダンプティは、ほとんど原作通りに、“To ‘*gyre*’ is to go round and round like a gyroscope. To ‘*gimble*’ is to make holes like a gimblet.”「‘*gyre*’ はジャイロスコープのようにくるくる回ることで、‘*gimble*’ はギムレットのように穴をあけることだ」と述べるのだが、ケイト＝アリスの発する上記の質問に対する彼の答えの中での ‘*gyre*’ の発音は「ガイア」ではない。「ジャイア」となっているのである。直後の ‘gyroscope’ 「ジャイロスコープ」に合っているので、この「ジャイア」の方が「ガイア」よりも自然に聞こえる。あるいは、彼は、「ジャイア」と言い直すことによって、ケイト＝アリスの「ガイア」という発音は間違いであることを、それとなく指摘しているようにも取れる。そうだとすると、原作の『鏡の国のアリス』に見られたような、アリスとハンプティ・ダンプティとの協調的な関係とは逆の、年長の男性と年下の女子との、年齢差や性差を意識した作りにこの場面はなっていることになる。この考えに立てば、このシーン全体のケイト＝アリスのいささか不機嫌そうな表情の説明も付くだろう。しかしながら、映画全体としてみた場合、発音が統一されていないという問題は残る。詩の朗読の際は、ケイト＝アリスも、ハンプティ・ダンプティも、共に「ガイア」であるのに対して、語義の説明の部分だけが「ジャイア」となっていて、映画全体では不統一であるのだ。ここは、キャロルの指示には敢えて従わず、ハンプティ・ダンプティの説明の中での「ジャイア」に合わせる形で、詩の朗読も「ジャイア」で統一しておいた方が良かったと思われる。そうなっていないのは、単なる不注意のためであるのか、あるいは、元来細かい発音の違いには何の頓着もないせいであるのか、それとも何らかの必要性があってのことなのか、判断し難い。ここでは、この映画では両方の発音が同じ場面でされていて、それが非常に不自然である、という事実を指摘するにとどめておく。

同じ単語でありながら発音が一定していない例として、ルイス・パジェットの

「ボロゴーヴはミムジー」の朗読の音声も挙げておきたい。[25] 問題となるのは ‘*gyre*’ ではなく、‘*gimble*’ の方である。これは比較的珍しい事例であると思われる。「ジャバーウォッキー」の詩の始めの４行が引用されている、作品の結末に近い部分では、‘*gyre*’ と ‘*gimble*’ は、それぞれ「ジャイア」と「ジンブル」と読み上げられている。‘*gyre*’ を正しく「ジャイア」と発音しているのは良い。それに対し ‘*gimble*’ を「ジンブル」と読むのは如何なものか。やはりここは「ギンブル」と言うべきであろう。このように１度目は「ジャイア」と「ジンブル」で、違和感があったのだが、２度目にこれらの語が発音される際には、「ジャイア」と「ギンブル」という〈正しい発音〉に変化している。朗読者が最初に ‘*gimble*’ を「ジンブル」と読んでしまった理由は、「ジャイア」の「ジャ」につられてしまったということに過ぎないかも知れない。よくありがちなミスの類であって、特に深い意味はなさそうである。そして、２度目には彼は「ジャイア」と「ギンブル」という〈正しい発音〉で読み上げている訳だが、発音が正しいものに変わった理由も定かではない。たまたま正しい言い方ができたという程度のことであろうか。何れにせよ、‘*gimble*’ を、初めは「ジンブル」と言い、後では「ギンブル」と言っている訳で、朗読全体としては不統一であることに変わりはない。

ただし、この発音の揺れを、単なる間違いと取るのではなく、作品の内実に即した解釈をすることによって理由付けをすることも可能である。今まさに子供達の姿が消滅して行くのを目の当たりにした父親パラダイン氏の深甚なショックを表現しているということである。

> It was a leaf torn from a book. There were interlineations and marginal notes, in Emma’s meaningless scrawl. A stanza of verse had been so underlined and scribbled over that it was almost illegible, but Paradine was thoroughly familiar with “Though the Looking Glass.” His memory gave him the words—
>
> ’Twas brillig, and the slithy toves
> Did gyre and gimble in the wabe.
> All mimsy were the borogoves,
> And the mome raths outgrabe.

[25] ajabrin, “Mimsy Were the Borogoves—part 6 of 6 (2007/12/18)” <https://www.youtube.com/watch?v=oxtYJGu40yA>（2019 年 11 月 22 日閲覧）

Idiotically he thought: Humpty Dumpty explained it. A wabe is the plot of grass around a sundial. A sundial. Time—It has something to do with time. A long time ago Scotty asked me what a wabe was. Symbolism.

’Twas brillig—

A perfect mathematical formula, giving all the conditions, in symbolism the children had finally understood. The junk on the floor. The toves had to be made slithy—vaseline?—and they had to be placed in a certain relationship, so that they’d gyre and gimble. (209)

それは本から引き裂かれたページだった。行間と余白の部分には、エマの意味のない殴り書きがいっぱいしてあった。詩の一節はアンダーラインと書き込みで判読しようがないほどだった。しかし、パラダインは『鏡の国のアリス』をよく覚えていた。記憶で言葉が甦った——

ブリリグともなれば、スライジイ・トーヴは
　ウェイブにジャイアし、ギンブルし
ボロゴーヴはまことミムジイとなりて
　モーム・ラースもアウトグレイブす

気の抜けたようになって、彼は考えた。ハンプティ・ダンプティが説明していた。ウェイブは、日時計のまわりの芝生だと。日時計。時間——時間と何か関係があるのだ。ずっと前、スコッティが、ウェイブとはなんだと聞いたことがあった。シンボリズムか。

ブリリグともなれば——

全ての条件を満たす、シンボルで表した完全な数学の公式。子供達は、ついにそれを理解したのだ。床の上のガラクタ。トーヴはスライジイにせねばならない——ワセリンか？——それらにあるつながりを持たせておくことにより、初めてジャイアし、ギンブルするのだ。[26]

このように「ボロゴーヴはミムジー」では「ジャバーウォッキー」の詩の中の言

[26] 翻訳は、伊藤典夫訳を参考に、原文に即して一部語句を修正したものである。ただし「ジャイアし、ギンブルし」の部分は伊藤の翻訳のままである。つまり、彼の判断は筆者と同じで、「ジャイア」と「ギンブル」が正しいと考えていることになる。

葉がそれぞれ新たな役割を担って使用されることになる。ただ、その役割自体が一体どういうものであるのか、なぜ子供達は去って行ってしまったのか、こうした謎は、パラダインにとっては謎のままに残り、何の解決の糸口もつかめないままだ。そうした立場に置かれた彼の苦しみが、朗読の際の発音の不安定さにつながったという解釈ができる訳である。

以上、見てきたように、英語での詩の朗読や映画での台詞、楽曲の歌唱といった音声資料をいくつか聞いてみた限りでは、‘*gyre*’の発音は「ジャイア」か「ガイヤ」か、‘*gimble*’の発音は「ジンブル」か「ギンブル」かの決着は、いまだに着いていないようである。個々の作品の中でいずれかに統一されている場合はまだしも、一つの作品の中で発音が揺れ動いてしまっている例も見られた。個別の例では変動の理由を想定することが可能であるが、ことによると発音に関していずれの例においても十分な注意が払われておらず、その都度話者が自分の好みで発音してしまっているようにも取れる。

さらに、これらの単語だけを取り出して発音させてみた場合も、どちらかに定まってはいないようである。例えば、英語の発音を聞かせてくれるウェブサイト、“Definitions”（https://www.definitions.net）は、アメリカ英語の Alex、イギリス英語の Daniel、オーストラリア英語の Karen、インド英語の Veena の、４人の英語話者がいろいろな単語を発音してくれていて、このサイト自体、英語の発音に困った際は大変参考になる。[27] ところが、我々が問題にしている言葉に関しては事情が異なっている。‘gimble’については、アメリカ英語の Alex は「ギンブル」と言っているのに対し、イギリス英語の Daniel、オーストラリア英語の Karen、インド英語の Veena は、共に「ジンブル」と言っている。人によって発音が一定していないのだ。[28] 一方の‘gyre’はどうかと言えば、アメリカ英語 Alex とイギリス英語の Daniel は、「ジャイア」、オーストラリア英語の Karen は、語尾を飲み込んで「ジャイ」と言い、インド英語の Veena は、語尾を言い切って「ジャイ」と言っているように聞こえる。[29] ４人いずれも「ジャイア」ないし「ジャイ」であって「ガイア」ではない。もっともこの項目には、発音記号の [dʒaɪər] が添えられているので、もし彼ら彼女らが発音記号を先に見ていれば、「ガイア」と発音される余地は、最初からなかったのかもしれない。そうだとすれば、この〈正しい発音〉に導いたのは [dʒaɪər] という記号を記載した人物であるということ

---

[27] トップの画面では４人だが、より多くの情報を求めたければ、都合９人の発音を聞くことが可能である。

[28] <https://www.definitions.net/definition/gyre>（2019 年 11 月 22 日閲覧）

[29] <https://www.definitions.net/definition/gimble>（2019 年 11 月 22 日閲覧）

になるだろう。一方の ‘gimble’ の項目については、発音記号は何も記されていない。各自の判断で発音することができたために、発音が２通り聞かれたということであろうか。いずれにしても、このネットの情報は、録音の方法だけでなく、各発話者の出自すら明らかでなく、例が少ないため統計的にも無意味であり、信憑性は高くない。敢えてここで言及したのは、現代のネットの利用法を紹介する意図の方が大きい。また、今後ビッグデータとして大量の音声が収集されれば、研究の可能性は広がるはずなので、その萌芽が現時点で存在することの証左として記すことにしたということである。

VI

前節では、英語の音声面での観察をしたが、「ジャイア」と「ギンブル」はむしろ少数派で、「ガイア」と「ギンブル」に傾いているという結果であった。ただし、伊藤典夫の翻訳では、正しく「ジャイア」と「ギンブル」を採用していたことが注目すべき点であった。伊藤の訳は厳密には『鏡の国のアリス』訳ではなく、別の作品に引用された「ジャバーウォッキー」の訳なのであるが、同じものだと解釈すれば、それは大した問題ではなかろう。むしろ、〈正しい発音〉を日本語でも再現できている点に我々は注目すべきであると考える。実際、「ジャバーウォッキー」の詩の日本語訳では、原作の持つ音の感覚までを表現し得たものは少ない。やはり、大抵の場合、言葉の意味を訳す方に主眼が置かれるためであろう。だが、少ないながらも、音をも日本語で表現しようと試みたものも存在している。そして、そうした訳では、面白いことに、‘*gyre*’ に関しては、いずれも「ガ」でなく「ジャ」の方を生かす配慮をしている。作者キャロルの指示には従わず、むしろハンプティダンプティの説明を重んじているのである。以下においては、このような翻訳の例をいくつか見ていくこととしたい。以下の引用の１行目と２行目は「ジャバーウォッキーの歌」の初出時と、ハンプティ・ダンプティの説明の直前の箇所からの引用で、都合２箇所にまたがることになる。引用の３行目以降は、ハンプティ・ダンプティの説明の部分からの引用である。まず、芹生一の訳を挙げるが、以下のように「ジャ」の音が採用されている。

そはあぶときなり　ぬらなやかなる
　トーブらじゃいりぬ　まひろきりして（37, 163）

「で、『じゃいりぬ』は？」
「『じゃいりぬ』はな、ジャイロスコープみたいにぐるぐるまわった、ということさ。」・・・「・・・それから、『きりして』は錐みたいに穴をあけて・・・」（164、166）[30]

矢川澄子も「ジャ」を響かせている。

ゆうまだきらら　しなねばトオブ
まわるかのうち　じゃいってきりる（28-29、114）

「それでは〈じゃいる〉と〈きりる〉は？」
「〈じゃいる〉はくるくるジャイロスコープみたいにまわること。〈きりる〉は錐みたいに穴をあけること」（115）[31]

また、最近の河合祥一郎による訳も同様だ。引用では行間が一定していないが、原文のルビや傍点を再現したためである。

そはやきに時（どき）　ぬなやかな　濤部（とうぶ）ら、

にもずをじゃいり、錐（きり）めく。（30、122）

「それで、『じゃいる』と『錐めく』は？」
「『じゃいる』は、ジャイロスコープみたいにぐるぐるまわることだ。『錐めく』とは、錐のように穴をあけるということだ。」（123）[32]

このように、芹生、矢川、河合の３者とも、‘*gyre*’を訳した箇所に関しては上手く「ジャ」と言っていて、「ガ」を採用していない。音声に関心を払って訳す場合はこのように「ジャ」を選択するということが、「ジャイロスコープ」と絡め

---

[30] 芹生一 訳『鏡の国のアリス』（偕成社文庫、1980 年）では、理由は定かでないが、「きりして」の説明が「じゃりいぬ」の説明と同時にはなされておらず、後段に送られてしまっている。
[31] 矢川澄子 訳、金子國義 絵『鏡の国のアリス』（新潮文庫、1994 年）
[32] 河合祥一郎 訳『鏡の国のアリス』（角川文庫、2010 年）

たハンプティ・ダンプティの説明を受ける必要上、当然の配慮として存するということなのであろう。その場合はキャロルの指示には従っていないことになるが、音を生かして訳出する必要上、これは当然の措置であろう。

しかしながら、脇明子は ‘*gyre*’ を訳した箇所について「ガ」の音を採用している。こちらはキャロルの「硬く」という指示を文字通りに生かそうとしているからだろう。

> そはゆうやきどき　ぬるしなきトーヴども
> 　にもひろに　ガイリし　キリリしたりき（36、153）

> 「じゃあ、『ガイリ』とか『キリリ』とか言うのは？」
> 「『ガイリ』というのは古い言葉で、今なら『ジャイリ』と書くのがふつうじゃ。これは、方位測定に使うジャイロスコープみたいに、おなじほうをむいてぐるぐるぐるぐるまわることでな、『キリリ』というのは、とがったもので細い穴をあけることじゃ。」（155）[33]

硬い「ガ」の音に沿って「ガイリ」としたのは、キャロルの指示に従っている訳だ。しかし、無理に「ガイリ」としたことが、後で問題になって来てしまっている。すなわち、ハンプティ・ダンプティがかなり苦しい説明を強いられることになってしまっているのだ。「古い言葉で、今なら『ジャイリ』と書く」などという、原作にはない文言を補うことで、何とかキャロルの指示の硬い音と「ジャイロスコープ」の柔らかい音とを両立させようとしている。そもそも初めから「ガイリ」でなく「ジャイリ」としておけば何でもなかったところなのだが、無理が祟っている。[34]

現在入手可能な日本語訳を全て見た訳ではないが、以上のようにいくつかの例を見て分かるのは以下のようなことだ。ハンプティ・ダンプティが「ジャイロスコープ」を持ち出している限り、‘*gyre*’ の発音に関しては、「ジャイア」としておくのが無難であり、この部分の翻訳においてもできうる限り「ジャ」の音を生かす方が良い。それに対して、ハンプティ・ダンプティの説明を度外視しして済ますことのできる場合もある。それは詩の本体のみを独立させて読む場合だ。そ

---

[33] 脇明子 訳『鏡の国のアリス』（岩波少年文庫、2000 年）

[34] どうしてもこの方式を取らざるを得ないということであれば、筆者なら、古い言葉の方を「ジャイリ」とし、（作者キャロルが後から余計なことを言ったので）今は「ガイリ」となった、というように、順序を逆にすることだろう。

の際は、キャロル本人の意思を尊重して‘*gyre*’は「ガイア」と言っても良いことになるだろう。ただし、作品全体を通じて不統一になることを避けるべきであると考えれば、ここは作者の指示は初めからなかったことにして、「ジャイア」としておくべきである。作者であるキャロル自身が発音の指示をしているとはいえ、「序文」はあくまでも「序文」に過ぎないのであって、作品の〈外側〉のものである。それは参考程度にとどめ、我々はあくまでも作品の〈内側〉に書かれていること、すなわちこの場合は「ジャイロスコープ」という語をわざわざ持ち出したハンプティ・ダンプティの説明にこそ重きをおくべきだと考える。

これと似た事情が、ジョナサン・スウィフト（Jonathan Swift）の『ガリヴァー旅行記』（*Gulliver's Travels*）にも見られる。語り手ガリヴァーは、第２篇で訪れた巨人国の呼称は「ブロブディンナグ」（Brobdingnag）でなく「ブロブディンラグ」（Brobdingrag）が正しいとわざわざ述べて、読者を煙に巻いているのであるが、その言を以って『ガリヴァー旅行記』本体の「ブロブディンナグ」が「ブロブディンラグ」に改められることはない。あくまでも元の「ブロブディンナグ」のままで何の問題もない。というのは、誤植の件が書かれているのは「ガリヴァー船長より従兄弟シンプソンへの手紙」‘A Letter from Capt. Gulliver to his Cousin Sympson’であって、作品の本体に書かれているのではないからだ。その「手紙」の中でガリヴァーは、自らの『旅行記』の真実性について以下のように述べる。

> Indeed I must confess, that as to the people of *Lilliput*, *Brobdingrag*, (for so the Word should have been spelt, and not erroneously *Brobdingnag*), and *Laputa*, I have never yet heard of any *Yahoo* so presumptuous as to dispute their Being, or the Facts I have related concerning them; because the Truth immediately strikes every Reader with Conviction. [35]

> 正直な話、リリパット、ブロブディンラグ（これが正しい名称で、ブロブディンナグは誤植です）、ラピュタの人々については、その存在もしくは私の語った事実に疑念を呈するほどに思い上がったヤフーがいるという話を聞きませんが、それはその真実が直ちに全ての読者を納得させるからです。[36]

---

[35] Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* (Oxford UP, 2005) 9.
[36] 富山太佳夫 訳『ユートピア旅行記叢書６ ガリヴァー旅行記』(岩波書店、2002年）10 頁。

スウィフトの場合は、この誤記の情報が冗談の類であることが誰の目にも分かり易いように書かれているので、キャロルの書いた「序文」の場合の、冗談とは言い切れない真面目な書きぶりとは明らかに異なってはいる。ただし、作品の本体とその付属物とでは、扱われ方に差があって当然であるという点において、「ブロブディンラグ」の事例は、キャロルの「序文」のような付加的な文章の取り扱い方を考える際に参考にすべき例の一つであるだろう。

さらに、発音の区別に関して、問題の本質に遡って考えれば、先に、英語の ‘g’ の発音は一義的に定まらないと書いたが、これを言い換えれば、英語では ‘g’ の綴り字で [g] も [dʒ] も表せるということである。片や我が日本語では、「ガ」と書けば「ガ」であり、「ジャ」と書けば「ジャ」である。どちらでも良いということではない。こうした言語の特性を訳者たちは大変な苦労の末乗り越えようとして来ているのだ。我々はともすれば、この訳は良い、この訳はそうでもないなどと、あげつらいがちだが、それは彼ら彼女らに対して失礼というものだろう。この点よく肝に銘じたい。その点で言えば、『翻訳の国の「アリス」』での楠本君恵の態度は注目に値する。彼女は、良い訳を論じる際は、訳者名を明記するのだが、問題を抱えていると判断したものは、訳者名を伏せているからだ。学問的な公正さと資料的な価値に関しては、この曖昧さは欠点となるのだが、控えめな態度を取っている点には好感が持てる。[37]

Ⅶ

前節では、‘*gyre*’ の発音について見てきたが、一方の ‘*gimble*’ に関してはどう読むべきであろうか。結論から言えば、これに関しては、キャロルの指示通り、硬く「ギンブル」としておくべきであると考える。もちろん、この発音ならば、ハンプティ・ダンプティの説明にある ‘gimblet’ の硬い ‘g’ の音と一致していて、両者の言葉を同様に尊重することができるからである。だが、柔らかく「ジンブル」と言う可能性はないのだろうか。我が国の訳者たちがこの件をどう考えているか、さらに翻訳をいくつか見ていこう。すると、‘*gimble*’ に関しては、「錐」という意味を生かす方に主眼があるためか、前節で取り上げたいずれの訳書でも、音声の面での配慮はあまり十分でないことが分かる。いずれの訳書においても、濁音の「ガ」や「ギ」あるいは「ジ」ではなく、清音の「キ」の音に止まっているからだ。やはり「錐」という日本語の意味を述べるために、‘*gimble*’ に関して

[37] 楠本君恵『翻訳の国の「アリス」』（未知谷、2001 年）参照。

は、訳をこれ以上のものにすることは難しいという事情があるのだろう。ただし、ここは「ギリギリ」という日本語の濁音を使う方法があり得る。唯一こうした手法によっているのが、以下の高橋康成の訳である。「ジャバーウォッキー」の冒頭の２行と、注釈として訳出されたハンプティ・ダンプティの説明の箇所は、以下のようである。

そはゆうとろどき　ぬらやかなるトーヴたち
まんまにて　ぐるてんしつつ　ぎりねんす（234、236）

「じゃあ《ぐるてん》と《ぎりねん》ていうのは？」
「《ぐるてん》するちゅうのは、ジャイロスコープみたいにぐるぐる回転すること。《ぎりねん》するちゅうのは、錐みたいに捻(ねじ)って穴をあけることよ。」（238）[38]

２行目の前半は「ジャ」も「ガ」も聞かれない。わずかに「ぐるてん」での濁音がそれに近いのみである。一方、後半の「ぎりねんす」では「ギリギリ」という擬音に含まれる硬い「ギ」の音を響かせることに成功していて、他の訳者たちに比べ、ここは流石に一日の長があると言って良かろう。

この箇所もそうだが、キャロルの作品の翻訳は、どこを取っても本当に翻訳者泣かせである。言い換えれば、キャロルの翻訳におけるチャレンジのし甲斐は、他の数多ある海外の文学作品の追随を許さない、難度の高い部類に入ることは間違いない。そこで、参考までに、そうした苦労を経て出来上がったと思しき他の訳者の成果もいくつか挙げておこう。いずれも今世紀に入って出版されたものである。[39] 初めに安井泉による訳を挙げる。

---

[38] 高橋康成・沢崎順之助 訳『原典対照 ルイス・キャロル詩集』（ちくま文庫、1989 年）。これと同じ訳が『澁澤龍彦文学館７ 諧謔の箱』に収められているが、「まんまにて」の後に１字空けてなく「まんまにてぐるてんしつつ　ぎりねんす」となってしまっている。また、ハンプティ・ダンプティの説明も添えられていない。高橋康成による『鏡の国のアリス』全体の訳については、安井のリストにもなく、残念ながら未訳かと思われる。安井泉『ルイス・キャロル ハンドブック：アリスの不思議な世界』（七つ森書館、2013 年）巻末の、木下信一 編「ルイス・キャロル書誌」参照。

[39] 数多くの翻訳からいくつか挙げようとする際、その選択は恣意的にならざる

ゆうげ火に　しなぬるトーブ

回(かい)してうがつ穴　一面（28、112）

「『回(かい)して』と『うがつ』は」

「『回(かい)して』は、回転儀のようにぐるぐるまわること。『うがつ』は取っ手の付いたきりのようなもので穴を開けるということだ」（113）[40]

安井が「回して」のところにルビを振って「かいして」と読ませているのはその後の「回転儀」に平仄を合わせての配慮であろう。ただ、普通は「まわして」と読むものを敢えて「かいして」とするのは多少苦しいだろう。後半の『うがつ』に硬い「ガ」の音が入れ込まれている点は良い。次は、同じくルビを活用した、山形浩生の訳例である。

それは煮(に)そろ時(じ)、俊(しゅ)るりしオモゲマたちが

幅かりにて環繰(わぐ)り軀捩(くねん)する頃（34、173）

「じゃあ『環繰(わぐ)る』と『軀捩(くねん)する』は？」

「『環繰(わぐ)る』のは、回転儀(ジャイロスコープ)みたいにぐるぐる回ること。『軀捩(くねん)する』は、コルクぬきみたいに穴をグリグリと開けることである」（175）[41]

を得ない。清水孝純「ルイスキャロルの翻訳をめぐる風景」での選択の基準は、入手し易さ、読み易さのためであろうか、文庫本になっている。『アリス』の数多ある訳は、木下信一が作成したサイト、“「アリス」邦訳ブックレビュー” <http://www.hp-alice.com/lcj/g_contents.html> に詳しい。

[40] 安井泉 訳『鏡の国のアリス』（新書館、2005 年）は、作品本体の訳だけでなく、前後に付けられた様々な文章をもしっかり訳してあり、資料的な価値は高い。訳文はいささか硬く、楽しむためというよりは勉強用という趣である。

[41] 山形浩生 訳『鏡の国のアリス』（朝日出版社、2005 年）は、元々の媒体がネットということで、書籍でも節ごとに行間が空けてあるなど、ネット的な書式によっていて読み易い。また、スソアキコによるイラストも可愛らしい。

山形訳は、この引用のように、ルビだけでなく、ゴシック体の太字も多用してあり、いろいろな工夫に満ちている。ただしこの箇所については、「環繰る」、「軀捩する」ともに、日本語として全くこなれていないため、非常に読みづらい。「環繰る」と「回転儀」との関連も、理詰めな感じはあるものの、かなり薄い。

３つ目には、少し一般的ではないが、絵本の訳を取り上げる。杉田七重による訳である。山形とは対照的に、日本語として見た場合は、何の違和感もない、素直に頭に入って来るものだ。

> *アブリドキぞろぞろ登場しなばしかトーブ*
> *ハムシバをきりくるきりくる*（26、110）
>
> 「“きりくる”っていうのは？」
> 「きりは穴をあける錐。くるくる回してつかうだろう。その動きによく似た回転運動を意味する」（111）[42]

読み聞かせを意識してのことだろうが、杉田訳はこのように流麗な日本語になっている。しかしながら、この訳には別の問題がある。‘*gimble*’に相当する部分だけが訳されていて、‘*gyre*’については全く省かれてしまっているのだ。おそらく、一字一句正確に訳す責任は、絵本の読者に対しては果たさなくても良いだろうという判断からであろうが、この省略はかなり残念な点である。こうして見てみると、訳者によってどの部分を重要視するかで、出来上がった訳が全く異なって来てしまう。本当に『アリス』は手ごわい作品であることを、以上のように数少ない例だけからでも、如実に示すことが出来たのではないだろうか。

さて、最後に高山宏の亜紀書房版『鏡の国のアリス』の巻頭の部分の「1897 年版序文」を見てみよう。[43] これは、キャロルの発音の指示が書かれた例の「序文」の訳である。ここで高山は大層面白い訳し方をしている。原文の ‘make the ‘g’ *hard* in “gyre” and “gimble”’ の箇所は「「くるくる」「きりきり」はあえて濁音にせず。」となっているのだ。これは訳ではなく、訳者自身の翻訳の方針の説明で

---

[42] 杉田七重 訳『鏡の国のアリス』（西村書店、2015 年）は、ロバート・イングペン（Robert Ingpen）の絵が主体である。絵は全体的に優しい筆致であるが、ハンプティ・ダンプティの全身が、顔面のみからなる白っぽい卵様に描かれていて非常に不気味である。

[43] 高山宏 訳、佐々木マキ 絵『鏡の国のアリス』（亜紀書房、2017 年）4 頁。

ある。訳文を勝手に変えてしまうのは如何なものかと思うが、このように、訳文の細部にあまり拘泥せず、自由奔放で遊び心に満ちた記述を紛れ込ませることも大変楽しいものだ。また、濁音を避けるという高山の方針は、彼が、‘borogove’ をいずれの翻訳でも「ぼろこうぶ」または「ぼろこおぶ」と記していることにも、実は関係しているだろう。‘borogove’ は、誰が見ても「ボロゴーヴ」か「ボロゴオヴ」なのであるが、そうはなっていないのだ。亜紀書房版の『鏡の国のアリス』は、前の２種の東京図書版（1980 年、1994 年）や、後の青土社版（2019 年）とは全く異なる方針の下に出版されていて、現代風のイラストも楽しい気楽な本なので、この版だけでも濁点をつけて「ぼろごうぶ」または「ぼろごおぶ」としておいても、咎める者は誰もいなかったであろう。それでも首尾一貫して濁音を避けようとする態度には、稀有な「学魔」としてのこだわりが強く感じられる。

さて、‘*gyre*’ や ‘*gimble*’ の発音の問題に戻ろう。我々はこれまで様々な翻訳を見て来たが、中でも伊藤による「ボロゴーヴはミムジイ」の中の「ジャバーウォッキー」を扱った箇所は、正しく「ジャイア」と「ギンブル」になっているだけでなく、詩の全体を通して色々な新造語を無理して翻訳することをせず、カナ表記で統一していて、かえって潔い。冒頭の４行を再度引用しておこう。

ブリリグともなれば、スライジイ・トーヴは
　ウェイブにジャイアし、ギンブルし
ボロゴーヴはまことミムジイとなりて
　モーム・ラースもアウトグレイブす [44]

何らかの意味を担う訳語が全く当てられておらず、謎めいたカタカナ表記の羅列に過ぎない詩を目の当たりにしているという状況に読み手は置かれている。同じカナでも、これまでに挙げた訳例にもいくつか見られた平仮名とは事情が異なり、カタカナには情感よりは理性に訴える冷たい感じがある。カタカナは、外来語をはじめ、様々な述語や専門用語などに当てはめられるものだ。見慣れないものをとりあえず表記するための用字法であるとも言える。自分の子供たちがはまり込んで行きつつある世界の成り立ちが全く理解できない主人公パラダイン氏の当惑自体を、カタカナの羅列で以って、見事に表現していると言えるだろう。まさにこれは、『鏡の国のアリス』で、アリス本人が初めてこの詩を目にした時の状況と同じだ。彼女の場合は、後からハンプティ・ダンプティの説明を聞くことが

[44]「ボロゴーヴはミムジイ」70 頁。

できたのだが、パラダイン氏の場合は、そういった説明は誰からも聞くことができない。アリスの状況に輪をかけて困難な状況に置かれてしまっているのだ。既述のように、パラダイン氏は『鏡の国のアリス』を以前に読んでいて、ハンプティ・ダンプティの説明も知ってはいたのだが、彼が直面している不可解な現実においては、もっと別の詳しい解釈をすることが必要だったのである。そしてその解釈が自分ではできないという彼の苦しみが、伊藤の翻訳では単純なカタカナで表されている。この点に訳者の工夫が見られると言えるだろう。伊藤本人は「訳注」の中で、「本編の内容との関係から、このようなしまりのない、カタカナまじりの訳文になってしまった」などと述べているが、そういうことではないだろう。[45] 彼は決して翻訳を放棄しているわけではなく、作中人物の心情に想いを致した結果、意図的にカナ表記をしたに違いないのでる。この態度は翻訳というものの抱える限界と可能性について大いに参考になる事例であろう。無理をして不自然な訳語を当てる必要はないという場合もある、ということだ。

結び

以上、本論では『鏡の国のアリス』の中の詩「ジャバーウォッキー」の中で語られる様々な造語のうち ‘*wabe*’、‘*gyre*’、‘*gimble*’ に着目し考察してきた。‘*wabe*’ に関しては、その意味をハンプティ・ダンプティが説明する以前にアリスが易々と気づいたことを問題視し、アリスとハンプティ・ダンプティとが共同で ‘*wabe*’ の意味、すなわち「日時計のまわりの草地」を産出したとの解釈を提示した。さらに、この状況には、キャロルことドジソンが、例の舟遊びの際に居合わせた、アリスをはじめとする周りの人々との協調的なやり取りの中で『不思議の国のアリス』などの作品を生み出したことを反映されているのではないか、との推定をした。この推定は筆者独自のものではない。SF 作家ルイス・パジェットもまた同様の推定に立脚し、それをさらに極端な形に推し進めた結果、短編小説「ボロゴーヴはミムジイ」を執筆し得たのである。まさか、アリス本人が「ジャバーウォッキー」の作者であったとは。一方、我々一般の読者は、ややもすれば『アリス』作品は、キャロルが専一に創造したと見なしがちである。その要因として挙げられるのは、作者によって書かれた様々な詩や、『アリス』に基づいて制作された様々な映像作品だろう。しかしながら、それらはいずれも作品の本体の〈外側〉の条件であるに過ぎない。我々が依拠すべきは、あくまでも作品本体の中にある

[45]「ボロゴーヴはミムジイ」72 頁。

言葉でなければならない。そのことが伺える事例として取り上げた「ジャバーウォッキー」の中の造語 ‘*gyre*’、‘*gimble*’ は、共に適切な発音はあるにも関わらず、実際の発音は様々に揺れ動いていた。‘*gyre*’ の発音に関しては、作品本体の中のハンプティ・ダンプティの説明を尊重すれば「ジャイア」が正しいはずであるが、発音を指示が書かれたキャロルの「序文」を受けて「ガイア」としてしまった例も多い。また、「ジャバーウォッキー」に限らず『アリス』作品を翻訳する場合には常に難しい問題が生ずるものだが、これら ‘*gyre*’、‘*gimble*’ も例外ではないことが分かった。いずれの訳書にもそれぞれの特長があるのだが、とりわけ高山宏の自由な訳からは、些細なことを気にしないという態度も貴重であるという点で、教えられるところが大であった。また、伊藤典夫の訳は、いかに訳者が作品の中で描かれた登場人物の心情にまで配慮して表記の仕方を選ぶことが可能であるかということが分かり、大変参考になるものであった。

本論では、作品の成立の事情から、細かい語の発音や翻訳の上での問題にまで幅広く検討することができた。ただし、仮定や推測に基づいた曖昧な点が残されている点は否定し難い。今後は、作品成立にまつわる事情についての更なる検証が必要であろう。また、本論の中で、各種の映像化作品や音声資料に言及したが、それらの選択は恣意的なものであり網羅的なものではなかった。今後は調査の範囲を更に広げたい。特に、映画『ミムジー』は、本論と直接的な関係を持つはずのものだ。また、翻訳についても、現在入手可能な翻訳に全て当たることができた訳ではないことも瑕疵であろう。翻訳については、それらの年代的な変遷はどうか、日本語以外の他の言語の場合はどうか、「ジャバーウォッキー」以外の箇所はどうかなど、本論から派生してくる課題は実際のところ際限がない。本論はそうした諸課題の契機に過ぎないという面もあるだろう。いずれにせよ、研究対象として見た場合、『アリス』作品が持つ可能性の大きさと幅広さとが改めて確認できたはずである。

参考文献

Carroll, Lewis. *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass, and What Alice Found There.* London: Penguin Books, 1998.

———, retold by Jennifer Bassett with original illustrations by John Tenniel. *Through the Looking-Glass* [audio CD pack] (Oxford Bookworms Library: Classics: Stage 3). Oxford: Oxford UP, 2008.

Gardner, Martin, ed. *The Annotated Alice: Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass by Lewis Carroll*. Harmondsworth: Penguin Books, 1970.

Padgett, Lewis. "Mimsy Were the Borogoves." Silverberg, Robert, ed. *The Science Fiction: Hall of Fame, Vol. 1, 1929-1964*. New York: Tom Doherty Associates, 1970.

Swift, Jonathan. *Gulliver's Travels*. Oxford: Oxford UP, 2005.

ルイス・キャロル、河合祥一郎 訳『鏡の国のアリス』東京：角川書店、2010 年。

———、杉田七重 訳、ロバート・イングペン絵『鏡の国のアリス』東京：西村書店、2015 年。

———、芹生一 訳『鏡の国のアリス』東京：偕成社、1980 年。

———、高橋康成・沢崎順之助 訳『原典対照 ルイス・キャロル詩集』東京：筑摩書房、1989 年。

———、高山宏 訳、マーチン・ガードナー注『鏡の国のアリス』東京：東京図書、1980 年。

———、高山宏 訳、佐々木マキ 絵『不思議の国のアリス』東京：亜紀書房、2015 年。

———、高山宏 訳、佐々木マキ 絵『鏡の国のアリス』東京：亜紀書房、2017 年。

———、高山宏 訳、建石修志 絵『新訳 不思議の国のアリス 鏡の国のアリス』東京：青土社、2019 年。

———、矢川澄子 訳、金子國義 絵『鏡の国のアリス』東京：新潮社、1994 年。

———、安井泉 訳『鏡の国のアリス』東京：新書館、2005 年。

———、山形浩生 訳、スソアキコ絵『鏡の国のアリス』東京：朝日出版社、2005 年。

———、脇明子 訳『鏡の国のアリス』東京：岩波書店、2000 年。

楠本君恵『翻訳の国の「アリス」』東京：未知谷、2001 年。

清水孝純「ルイスキャロルの翻訳をめぐる風景」『Comparatio』12、九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会、2008 年、99-114 頁。<https://doi.org/10.15017/16069>（2019 年 11 月 27 日閲覧）

ジョナサン・スウィフト、富山太佳夫 訳『ガリヴァー旅行記』東京：岩波書店〈ユートピア旅行記叢書６〉、2002 年。

高橋良平 編『伊藤典夫訳 SF 傑作選：ボロゴーヴはミムジイ』東京：早川書房、

2016 年。
安井泉『ルイス・キャロル ハンドブック：アリスの不思議な世界』東京：七つ森書館、2013 年。

参考資料

木下信一 “「アリス」邦訳ブックレビュー” <http://www.hp-alice.com/lcj/g_contents.html>（2019 年 11 月 27 日閲覧）
ajabrin, “Mimsy Were the Borogoves—part 6 of 6 (2007/12/18)” <https://www.youtube.com/watch?v=oxtYJGu40yA>（2019 年 11 月 22 日閲覧）
“Definitions” <https://www.definitions.net>（2019 年 11 月 22 日閲覧）
Erutan, “Jabberwocky.” <https://music.amazon.co.jp/albums/B07CG57DP3?tab=CATALOG&ref=dm_wcp_albm_link_bh> （2019 年 11 月 22 日閲覧）
“Merriam-Webster” <https://www.merriam-webster.com/dictionary/wabe> （2019 年 11 月 22 日閲覧）
“Through the Looking-Glass (Full Audiobook)” <https://www.youtube.com/watch?v=hRLLrlOpx9c> （2019 年 11 月 22 日閲覧）

『アナザーワールド～鏡の国のアリス』（Alice Through *the Looking-Glass*）ジョン・ヘンダーソン監督、チャンネル 4 、1998 年。DVD。
『アリス・イン・ワンダーランド』（*Alice in Wonderland*）ティム・バートン監督、ディズニー、2010 年。DVD。
『ジャバーウォッキー』（*Jabberwocky*）テリー・ギリアム監督、アンブレラ・エンターテインメント・プロ、1977 年。 <https://www.youtube.com/watch?v=mKDxK7nNE0A>（2019 年 11 月 22 日閲覧）
『ドリームチャイルド』（*Dreamchild*）ギャビン・ミラー監督、TFI リミテッド、1985 年。<https://www.youtube.com/watch?v=wwnoJ-WSEEY>（2019 年 11 月 28 日閲覧）
『不思議の国のアリス』（*Alice in Wonderland*）ハリー・ハリス監督、アーウィン・アレン・プロダクション、コロンビア・ピクチャーズ・テレビジョン、1985 年。< https://www.youtube.com/watch?v=vyH_Vhh22AE>（2019 年 11 月 28 日閲覧）
『ミムジー：未来からのメッセージ』（*The Last Mimzy*）ボブ・シェイ監督、ニュー・ライン・シネマ、2007 年。DVD。

松島正一 編注『鏡の国のアリス』付属カセットテープ、東京 : 北星堂書店、1984年。